

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：34503
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：19K23122
研究課題名（和文）前・中期古墳漁具副葬資料の詳細分析に基づく「祭と葬の分化」の地域環境論的再検討

研究課題名（英文）New Perspectives on the "Division between Ritual and Funeral" Theory Based on Analysis of Burial Fishing Gears in the Early and Middle Kofun Period

研究代表者
魚津 知克（Uozu, Tomokatsu）
大手前大学・付置研究所・主任

研究者番号：70399129
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古墳への漁具の副葬について、前期から中期を中心に再検討を進め、以下の成果を得た。

第1に、4世紀から6世紀前半にかけての「海の古墳」は、近畿中央部政権と地方政権とが海上ルートで相互に連携して構成される倭王権の統治原理を鋭敏に示していることが明確になった。第2に、6世紀後半から7世紀にかけての「海の古墳」は、中央政府の主導による産業地域分担を基軸として編成された、さまざまな生産・貢納・生業・祭祀組織を反映していることが明らかになった。第3に、「祭と葬との分化」論の考察を基軸とした古墳時代倭王権・地方政権論の構築をめざし、生産用具全体を俯瞰した形で、首長層による地域経営の実態を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【古墳時代倭王権・地方政権論の構築】 「祭と葬との分化」論の考察を主軸に、古墳時代倭王権・地方政権論の構築を進めた。特に、祭祀遺構の様相を分析し、近年活発化している地域経営論との接続を試みた。

【漁具副葬資料の再検討】 漁具副葬資料について、出土状況を含めた再検討を進めた。感染症対策の影響もあり、全国遺跡報告総覧（<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>）等のリポジトリに支援されつつ調査をおこなった。

【海の古墳】を通した日本列島海洋文化論】 同時代の港湾とみなされる河口デルタや潟湖との関連を分析し、埋蔵文化財の調査研究における地理的特性把握の重要性を提起した。

研究成果の概要（英文）：This research program aims to revise the position of the buried fishing gears of the Kofun tumuli in the early to middle Kofun period.

First, it became clear that the principle of the ancient Yamato sovereignty connected tightly to the buried fishing gears, and the Middle Kinki government and the local governments had cooperated mutually by the sea route. Second, "the Kofun tumuli by the sea" reflected the various production, occupation and religious aspects, especially allotted industry areas by the leadership of the central government was realized as a key concept. Finally, from the point of the construction of the Kofun period Japan's sovereignty, this research program approaches the solution of the consideration of the "differentiation between ritual and burial." The actual situation of the area management by the central and local chiefs was crucial in the form that overlooked the whole production tools and production systems comprised of agriculture, handicraft and fishing.

研究分野：考古学

キーワード：海洋文化 漁具 生産力 鉄器 渡来系移住民 祭祀

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、鉄製・木製の生産用具に対する分析を軸に、古墳時代における農業・手工業・漁業の実態解明に努めてきた。その結果、社会における「生業」と「生産」という位相の異なる概念の位置づけが、古墳文化の在り方に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。「生業」は“自然環境に対処しながら編み出してきた暮らしの形態”、「生産」は“社会環境の大枠を維持しつつ内部を複雑化させる原動力となる基礎構造”だと、ひとまず理解できる。しかし、日本列島の古代社会は、すでに複層化している。海部や山部のように、「生業」を「生産」に巧妙に落としこむこともあれば、カミサりのように「生産」を保証する統治原理が地域の「生業」の場で定期的に再確認されるのが実態である。

その問題を検討するうえで、鉄製漁具副葬例は非常に重要である。なぜなら、鉄製漁具副葬が倭王権の統治原理に深く関連する一方、漁具自体には中期に渡来系製作技術がいち早く導入されるからである。そして、前期初頭から列島各地で認められる「海の古墳」との関連性も追及することで、「生業」と「生産」に紐づく支配権力の実態に迫ることができる。

関連する国内の研究動向としては、鉄製漁具副葬について、山中英彦氏の論考（「鉄製漁撈具出土の古墳について」『古代探叢』1980年）を嚆矢とし、その後も清野孝之氏が具体的かつ詳細に論ずることで（「古墳副葬漁撈具の性格」『国家形成の考古学』1999年）、研究が大きく進展してきた。研究代表者も、古墳副葬品全体の中での位置づけを試みた（魚津知克「古墳時代社会における鉄製漁具副葬の意義」『遠古登攀』2010年）。

前・中期「海の古墳」については、近藤義郎（「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』10号、1956年）、西谷真治（「海人びとの墓」『展望アジアの考古学』1983年）、山本三郎（「王権と海上交通・序説」『列島の考古学』1998年）の諸氏による論考がある。文献史学からも多大な関心が寄せられ、古代氏族との関連性で論じられた（藺田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本』5 1970年）。近年では「山海之政」の地域社会への具現化の過程とも関連付けられる（森田喜久男『日本古代の王権と山野河海』2009年）。研究代表者も、小論を草している（魚津知克「『海の古墳』研究の意義、限界、展望」『史林』第100巻1号 2017年：<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006598867>）。

国外に目を転じると、スカンジナビア半島の青銅器時代における海上交通の進展と海岸部の墳墓形成との関連性を論じた論考を挙げることができる(Kristiansen, K1987 Center and periphery in Bronze age Scandinavia, Centre and periphery in the ancient world)。東アジアにおいて中国では、「海のシルクロード」上に位置する華南地方の漢墓研究が盛んになってきた（呉伝鈞ほか編2006『海上絲綢之路研究』）。韓国においても、朴天秀の研究（『伽耶と倭』2007年）が注目される。

以上の研究動向を踏まえると、本研究は、地球全体を視野に入れた海洋文化論あるいは海洋文明論からも大きな意義を有する。

以上のような問題意識のもと、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、以下の2点である。

前・中期古墳における漁具副葬の背景

古墳副葬品組成の中で例外的なものとして捉えられてきた漁具に脚光をあて、新たな倭王権・地方政権像へつなげることを意図する。ただし、新奇な論を立てるのを目的とせず、遺物の徹底的な観察を踏まえた集成、出土状況の詳細な分析を貫徹させる。

「海の古墳」をとりまく地域環境と「祭と葬の分化」

前・中期の「海の古墳」をとりまく地域環境について調査をおこなう。特に、資料蓄積の著しい瀬戸内海沿岸や、従来あまり分析対象とならなかった北陸日本海沿岸に重点を置く。併せて、漁具副葬資料集成や地域環境調査分析を踏まえつつ、古墳時代の列島各地において、どの段階からどの程度まで「祭と葬との分化」が認められるのか、考察を進める。

3. 研究の方法

遺物・遺構双方の検討による前・中期古墳漁具副葬資料の分析

前期から中期の漁具副葬資料について、必要に応じて遺物の再実測をおこなう。同時に、副葬された漁具の出土状況を全国的に分析する。とりわけ、竪穴式石槨や粘土槨を埋葬施設とする場合、葬送儀礼のどの段階において副葬行為が執り行われたのかを、必要に応じて出土状況図・土層断面図の原図を参照するなどして解明する。

前・中期「海の古墳」地域環境の調査と分析

前・中期の「海の古墳」をとりまく地域環境について、瀬戸内海沿岸や北陸日本海沿岸を中心とした調査をおこなう。

「祭と葬との分化」考察を基軸とした古墳時代倭王権・地方政権論の構築

以上示した漁具副葬資料集成や地域環境調査分析を踏まえつつ、古墳時代の列島各地において、どの段階からどの程度まで「祭と葬との分化」が認められるのか、考察を進める。中小古墳や集落における石製祭器の動向も視野に入れつつ、国家形成に至る首長権を確立していった倭王権や地方政権にとって、海に面した地域環境は統治構造や地域経営構造にどのように作用したのか、カミ概念を含む自然観が具体的にいかに展開していたのかを明らかにしていきたい。

4. 研究成果

大きな成果として、以下の2点を挙げる。

前・中期首長墳における漁具副葬の目的に迫った

本研究により、従来の研究ではその意義が必ずしも明確でなかった鉄製漁具の副葬意義について、古墳の立地と副葬品組成とを関連させることで、大きな進展が見られた。たいへん興味深いのは、奈良県ホケノ山古墳のような早期古墳にも漁具副葬がなされているのだが、しばしば内陸部に立地している点である。

漁具副葬の目的は、前方後円墳もしくは前方後方墳という共通化した首長墳形態における副葬品セットに取り込むことで、「フォーマット化した統治原理」にて「海」を想起させることにある。つまり、「海」そのものを必ずしもストレートに表現する必要は無かった。

これは、前期から中期にかけての首長墓の立地からも裏付けられる。各地において、相次いで海岸近くに前方後円墳や前方後方墳といった首長墓が築かれるのであるが、これらの「海の古墳」に必ず漁具が副葬されているわけではなく、むしろ、先述したように、内陸部の前・中期の首長墳に漁具が副葬される。ただし、兵庫県西求女塚古墳のように、明確に「海の古墳」と呼べる立地もあるから、地域的特性に応じた検討が必要である。

地域ごとの生業・生産の変容が祭祀遺構に具現している実態を指摘

「祭と葬との分化」論の考察を基軸とした古墳時代倭王権・地方政権論の構築をめざし、生産用具全体を俯瞰した形で、首長層による地域経営の実態解明に取り組んだ。とりわけ、中期から後期にかけて列島各地で認められる土器集積遺構に鉄製生産用具が供献されている類例を通して、地域首長層のみならず、集落の有力者層が地域内の生業・生産の実態を踏まえつつ、積極的に関与している可能性を指摘した。

その点で、近年再検討が進んでいる地域経営実態論が極めて重要である。研究代表者も、地域首長以外、とりわけ流通の結節点に位置する集落の有力者層がいかに地域内の生業と生産とに関与していたのかについて、理論的な課題にも論及しながら、今後も考察を深めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Tomokatsu Uozu	4. 巻 Sep. 2019
2. 論文標題 Archaeological Heritage Management and Museum Activities in Kobe and Hanshin, Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ICMAH Annual Conference Paper	6. 最初と最後の頁 111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Tomokatsu Uozu	4. 巻 1
2. 論文標題 Archaeological Heritage Management in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Heritage Management and Cultural Tourism in India and Japan	6. 最初と最後の頁 354-371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 魚津知克	4. 巻 2021
2. 論文標題 鉄製農具・工具研究史からみた古墳時代社会へのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論集	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 魚津知克	4. 巻 15
2. 論文標題 総括・海辺に築かれし古墳	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美浜町歴史シンポジウム記録集1-	6. 最初と最後の頁 1-16, 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 魚津知克
2. 発表標題 古墳時代地域経営論再考序説
3. 学会等名 西摂東播研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 魚津知克
2. 発表標題 海の古墳研究の成果と課題
3. 学会等名 ひょうご歴史研究室『播磨国風土記』研究班第3回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Archaeological Heritage Management in Japan https://www.researchgate.net/publication/335984874_Archaeological_Heritage_Management_in_Japan
--

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ミャンマー	ヤンゴン大学	ダゴン大学		
インド	タミル大学	ケララ・マハラジャカレッジ		